

アンティオコス4世(エピファネス)の登場

Web「封印の古代イスラエル史を解く」『第18章 セレウコス朝支配下のユダヤ』より掲載

●前175年、ローマで人質となっていたセレウコスの弟エピファネスが解放されてシリアに戻り、アンティオコス4世として即位します。彼は、ダニエル書の描く「ひとつの小さい角」(8:9)であり、第一マカベア記では「悪の元凶」(1:10)と呼ばれた人物です。彼はセレウコス朝を再建するために、国粋主義的政策を採り、ギリシャ風の精神や生活様式を支配地域に強要し、ローマへの賠償金を払うために、違法な取り立ても平気で行うことにより、自らの王座を守ろうとしました。

●当時、ユダヤの大祭司であったのはオニアス3世でした。オニアス3世の弟ヤソンは、不当な欲望から、アンティオコス4世に金品を贈り、またユダヤの生活習慣をギリシャ風に変革する約束をして、オニアス3世を追放し、大祭司職を手に入れました。ヨセフスは、このとき、「オニアス3世は死亡した。」と書いていますが、第二マカベア記では、その後オニアスが暗殺されるので、ヨセフスの記述は史実ではないと判断されています。大祭司職となったヤソンは、ギリシャ名をイエスと言いました。イエスという名はヘブル語で「ヨシュア」なので、ごく普通の名前だったようです。ヤソンは律法を軽んじ、エルサレム内にギリシャ風の格闘競技場を造り、ギリシャ風の服装を奨励しました。しかし、数年後、前172年、ヤソンの弟メネラオスは、ヤソンよりも多額の賄賂を贈る約束をして、大祭司職を横取りしてしまいました。メネラオスは、第二マカベア記では、兄弟ではないとされていますが、ヨセフスの「古代誌XII」では、兄弟となっています。

●メネラオスが大祭司となったことにより、ヤソンはアンモン人の国に逃亡し、さらにはスパルタへと落ち延びました。しかし、メネラオスはヤソン以上に非道な行いをしました。神殿の黄金を横領したことについて、先の大祭司オニアス3世から批判されたことに腹を立てたメネラオスは、オニアス3世の逃亡先ダフネに刺客を送り、オニアスを暗殺してしまいました。このような事件で大祭司職の権威が落ちているところへ、アンティオコス4世(エピファネス)が乗り込んできました。彼は前169年、エジプトのプトレマイオスを攻め、エジプトを略奪しようとするのですが、ローマの妨害により計画は実現しませんでした。そこで、代わりに、エルサレムを略奪して帰りました。それから2年後、前167年、再度エルサレムに来ると、今度は神殿にあった金、燭台、冠、など全ての高価なものを奪い去りました。イスラエルの人々は深い悲しみと動揺の中に陥りました。

●さらにエピファネスは、各地の習慣を廃止し、すべてをギリシャ化する命令を出しました。それにより、エルサレムでも、律法に基づく犠牲の捧げ物が禁止となり、安息日遵守、割礼なども廃止されました。また、王は、エルサレムの神殿に、ゼウス像を安置し、これを拝むよう命令しました。このゼウス像は「荒す憎むべきもの」と呼ばれて、新約聖書でも終末の象徴として取り上げられています。律法の巻物は燃やされ、子どもに割礼を受けた母親は王の命令で殺されました。律法学者エレアザルは、口をこじ開けられて豚肉を食べよう強制されましたが、彼はそれを吐き出しました。その場にいた役人はエレアザルの友人でしたので、豚肉を清い肉と取り替え、これで王には豚肉を食べたことにしておこうと提案しました。しかし、エレアザルは「私を

陰府に送ってくれ。年をとって、嘘をつくのはふさわしいことではない。」そう言って、鞭打たれて死んで行きました。ヨセフス（古代誌 xii256）は「十字架に掛けられた者もいた」と書いています。

●このようなエピファネスの政策で、ユダヤ、エルサレムは大混乱に陥り、王に反対する者たちのある者は殺害され、ある者は奴隷としてエジプトに売られていきました。良識あるユダヤ人たちは、こっそりと王に隠れて律法を守り、ユダヤの独立と、信仰の自由が与えられる時がくるのを祈ったのでした。